

# 蘇れ医療

## 第4部 海の向こうに学ぶ

限られた医療の財源、人材をどのように活用するか。高齢化や医療費増大など、金融危機下でも変わらぬ問題克服の道しるべを、海の向こうに探った。

国の内外を問わず疲弊する救急室(ER)の救急医と、救急医療の現場。米国で昼働いて夜間も入る医師とは「夜勤専門医」という異色のシフトで克服しようとERは体力のある若手医師向き。四十代になると燃え尽きてしまう」とチャン。

米ワシントン州ペレヒューのオーバリーク病院に彼らがシフトに入ること勤務するエドワード・チャ(39)の出勤時間は夕暮状態に保つこともできる。七日連続で夜間十時こつた夜間専門医は全米間勤務、その後二週間は週で約千七百八人いる。

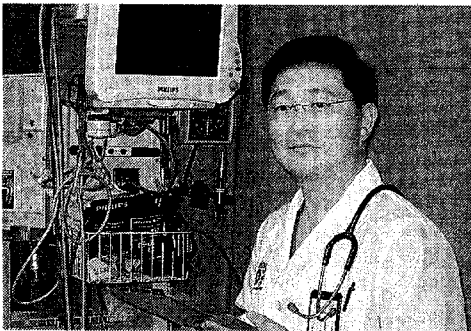
「ノクターニスト」と呼ばれる夜勤専門医は、救命なり妊婦が死亡した日本の過重労働で当直医不在と

### 救急、追いつかぬ態勢

ケースも、こうしたシフトなら防ぐことが可能だ。重症患者の命を救う大病院の本来の機能を発揮するには、軽症者の受診を防ぐ方策が欠かせない。無料の公的医療制度(NHS)を持つ英国では、軽症者の受診で救急病院の長

## 「軽症者」利用歯止めを汗

時間待ちが常態化し、二〇〇〇年、「全ての救急患者を(到着から)四時間以内に診察する」目標を設定。軽症者向けには、救急診療所「予約なし(ウォークイン・センター)」と医療スタ



夜勤専門のチャン医師(米ワシントン州ペレヒュー)＝ジョン・ネルソン氏撮影

「救急医の能力は高いが、システムが十分機能していない」。海外からはこう指摘される。例えば先進各国に比べ幼児(一―四歳)死亡率が高い小児救急。厚生労働省研究班が〇五、〇六年の記録を分析したところ、小児科医が各科の応援を

「意見、情報を郵便かメール(livyou@tokyoinkai.co.jp)にお寄せ下さい。日経ネットLDS(http://netplus.nikkei.co.jp)でも関連情報を掲載しています。

受け救命する態勢が整っていないと死亡例が多いことが判明。調査した大阪府立母子保健総合医療センター総長の藤村正哲(65)は「重症幼児を迅速かつ専門的に治療する体制整備が遅れている」と指摘する。

救急専用ヘリコプターの国内拠点数は十五カ所。救急ヘリ病院ネットワークによると、ドイツ(八十九カ所)、フランス(三十二カ所)、

英国(二十六カ所)を大幅に下回る。

「救急医の能力は高いが、システムが十分機能していない」。海外からはこう指摘される。例えば先進各国に比べ幼児(一―四歳)死亡率が高い小児救急。厚生労働省研究班が〇五、〇六年の記録を分析したところ、小児科医が各科の応援を